

# 中国人日本語学習者の名詞複合語アクセントの発音パターン ——北方方言・上海方言を母語とする学習者の比較——

柳 悦

## 1. はじめに

日本語のアクセントは習得しやすいようで習得しにくい、という感想を持つ外国人学習者は少なくない。それは単語の際に習ったアクセントが別の単語とつながると全く異なるアクセントになる、つまり複合語になると単語でのアクセントが適用できず、その習得に困難を伴うためであろう。そのため、単語量が増加するにつれ、アクセントに戸惑いを感じながら日本語の勉学を継続する或いは挫折する学習者もいると考えられる。実はそう感じているのは学習者だけではない、近年、日本語教育で韻律に関する研究が増加しているのを見ると、この問題に対する関心の高さが窺える。日本語は中国人学習者が多いため、中国人学習者を対象とした研究も多く、野澤・重松（1997）、福岡（1998）、鮎沢ほか（1999）などアクセント、イントネーションの習得に注目した研究例として挙げられる。しかし、これまでの研究報告を概観すると、学習者が苦手としている複合語アクセントに関しては、まだ専門的な研究が少なく、また調査方法を見ると聴取実験を主としたものが多いのが現状である。そこで、本研究はまず中国人学習者を対象に、名詞複合語アクセントの発音について調査し、学習者にはどんな発音パターンがあるのか、それを集計し、原因を探り、今後の日本語教育における複合語アクセントの習得への提言としたい。また中国には多くの方言<sup>(1)</sup>があり、それは主に音声において差があると一般に認識されており、そのため本研究も学習者の母方言に注目し、方言による影響にも関心を注ぎたい。

## 2. 調査方法及び分析方法

本研究の被験者は、中国人日本語学習者であり、上海市（上海方言を母語とする学習者 25 名）、山東省済南市（北方方言を母語とする学習者 26 名）に位置する高等教育機関の日本語専攻の 3、4 年生で、滞日経験はない。調査時点では上級学習レベルとなっている。また比較のために、日本人 8 名に対しても、同様の実験を行った。この実験への日本人協力者は、関東出身の大学生で、日本語の音声について、特に専門的な知識はなかった。

実験で使う単語は、すべて名詞で、上級の学習者には既習の 5 拍以上の常用複

合語 19 語である<sup>(2)</sup>。

調査手順として、実験単語リストを提示し、「〇〇がいいです」というキャリア文に埋め込み、被験者に 2 回ずつ読んでもらい、それを IC レコーダー (OLYMPUS 社製 Voice-TrekDS-20) で録音した。

分析方法としては、まず被験者が実際に発音した語のアクセント型を判定する際、すべて 2 回目の音声を使用することとした。また、判定するとき音声の系列による影響が出ないようにするため、男女、日本人と学習者の音声の提示順序がランダムになるよう編集した。編集には音声編集ソフト CoolEdit96 を使い、最終的にカセットテープに収録した。アクセント型の判定は、筆者がカセットテープから流れた単語を聞き取って、そのアクセント型を記録した。また判定結果を検証するために、日本語教育関係者 4 名<sup>(3)</sup>にもアクセント型を同様の手順で判定してもらった。結果が異なる場合は、音声分析ソフト Speech Analyzer 2.4 でピッチ曲線を抽出して筆者が総合的に判定した<sup>(4)</sup>。最終的に、すべての音声データにつき判定結果を 1 つにまとめたうえで正解率と発音パターン数などを用いて拍数別にグループ間の比較を行った。

### 3. 考察

#### 3.1 正解率

ここで、学習者の複合語アクセント発話実験の結果を提示する。

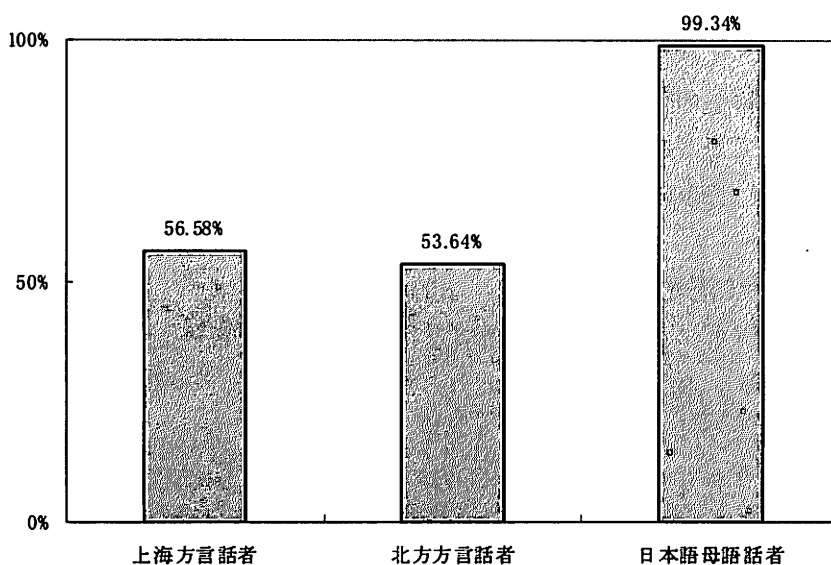


図 1 両グループ、日本語母語話者の正解率

図1から、全体的に日本語母語話者は100%に近い正解率だが、学習者の両グループともに50%台であることが分かる。

次に図2は複合語アクセントの変化基準を元に本実験の学習者の正解率を整理したものである。

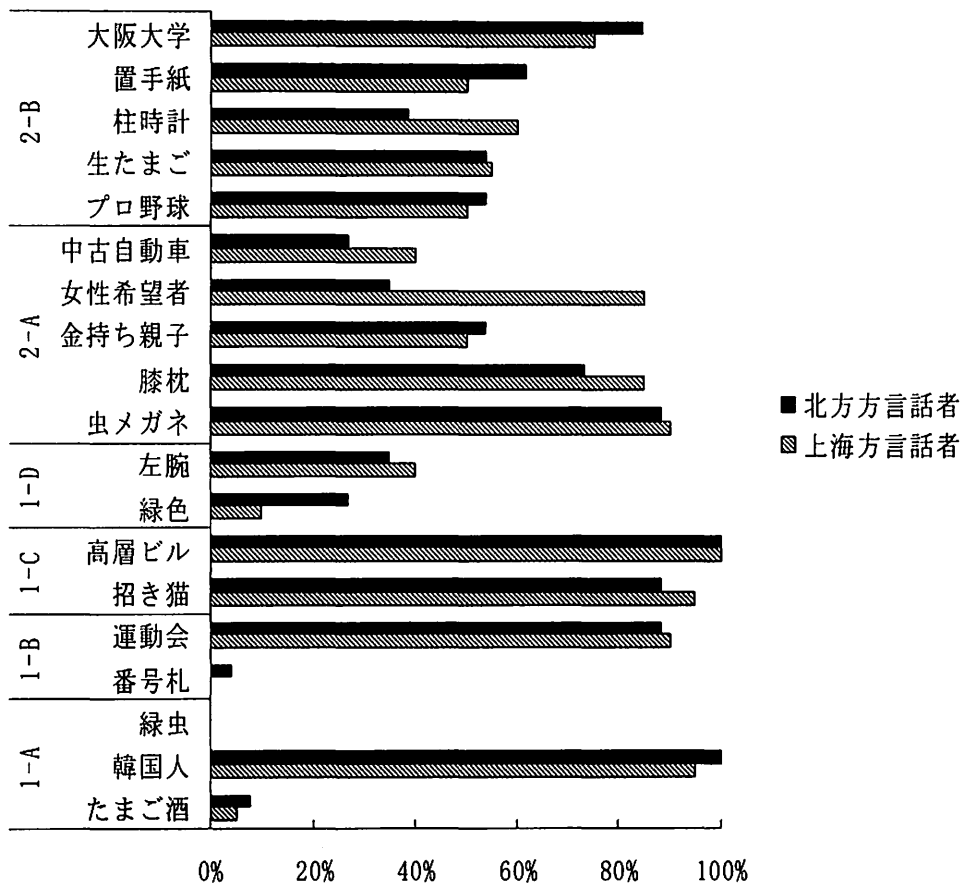


図2 両グループの複合語アクセント変化基準別正解率  
 ([1-A] などについては注2を参照されたい)

図2を見ると全体的には北方方言話者、上海方言話者ともに類似した傾向となっているが、1-C、2-Aの場合、上海方言を母語とする学習者のほうが安定していて、特に「女性希望者」のグラフでは、北方方言を母語とする学習者より正解率が大幅に上昇していることが分かる。また1-A、1-Bのようにアクセント核に特殊拍が関わったり、あるいは前部要素と後部要素の境目に来るなどの場合、正解率が両極端になって、習得の不安定さが分かる。

### 3.2 発音パターン

次に、学習者のアクセントが1語の中で2度上昇するという傾向があったので、それが主に複合語のどの部分で発生したかを見るために、表1～3に分析結果をまとめた。表の中で、アクセントパターンの表示は、表中の一番拍数が多い単語を基準にしたもので、下線部分は、後部要素1拍目を表し、太字の数値はその単語の正しいアクセントである。そこから、学習者の間違った発音パターンのほとんどが後部要素1拍目に集中しているが分かる。中には、後部要素1拍目で二回目の上昇が起きてしまったパターンも多く見られる。

表1 前部要素2拍語の発音パターン（表中の数字は% ○低●高 下線部分は後部要素1拍目）

学習者アクセントパターン	複合語		プロ野球	虫メガネ	生たまご	膝枕	置手紙
	学習者						
○●●●●	上海			5.00			20.00
	北方				3.85	7.69	3.85
○●●○○	上海		50.00	90.00	55.00	85.00	50.00
	北方		53.85	88.46	53.85	73.08	61.54
○●●●○	上海				10.00		
	北方		7.69		11.54		3.85
○●○○●●	上海		30.00	5.00	30.00	15.00	20.00
	北方		30.77	7.69	26.92	19.23	26.92
○●○○●● (後続助詞下降)	上海						
	北方			3.85			
○●○○●○	上海				5.00		10.00
	北方				3.85		3.85
●○○●●	上海		20.00				
	北方		7.69				

表2 前部要素3拍語の発音パターン (表中の数字は% ○低●高 下線部分は後部要素1拍目)

学習者アクセントパターン	複合語	緑色	左腕	たまご酒	緑虫	招き猫	柱時計	女性希望者	中古自動車
	学習者								
○●●●●●●●	上海	10.00	40.00	5.00	5.00				
	北方	26.92	34.62	26.92	15.38		7.69		
●○○○●○○○	上海	5.00			5.00				
	北方								
○●●●●○○○	上海			5.00	0.00	5.00			
	北方			7.69	0.00				
○●●●●○○○	上海	5.00	10.00	75.00	55.00	95.00	60.00		
	北方	23.08	7.69	34.62	53.85	88.46	38.46	3.85	
○●●●●●○○	上海							85.00	40.00
	北方							34.62	26.92
○●○○●●●●	上海			5.00					
	北方								
○●○○●○○○	上海			5.00					
	北方			3.85		3.85			
○●○○●●●●	上海								
	北方	3.85							
○●●●●●●●	上海	25.00	50.00	5.00	20.00		35.00	5.00	60.00
	北方	34.62	57.69	26.92	23.08	7.69	53.85		
○●●●●●○○	上海							10.00	
	北方							61.54	73.08
●○○○●●●●	上海	55.00			15.00		5.00		
	北方	11.54			7.69				

表3 前部要素4 拍語の発音パターン (表中の数字は% ○低●高 下線部分は後部要素1 拍目)

学習者アクセント パターン	複合語		番号札	運動会	韓国人	高層 ビル	金持ち 親子	大阪 大学
	学習者							
○●●●●●●●●	上海		5.00	5.00				
	北方							
●○○○○○	上海				5.00			
	北方							
○●●○○○	上海		0.00	90.00				
	北方		3.85	88.46				
○●●●○○○	上海		20.00		95.00			
	北方		7.69	7.69	100.00			
○●●●●○○○	上海		30.00	5.00		100.00	50.00	75.00
	北方		46.15	3.85		100.00	53.85	84.62
○●○○○●○○○	上海							
	北方							3.85
○●●○○●○○○	上海							10.00
	北方							
●○○○○○●●●●	上海							
	北方		3.85					
○●●○○○●●●●	上海						15.00	
	北方		7.69					
○●●●○○●●●●	上海		45.00				25.00	5.00
	北方		30.77				38.46	7.69
○●●○○○●○○○	上海						5.00	
	北方						3.85	
○●●●○○●○○○	上海							
	北方						3.85	
○●●○○○●●●○	上海							5.00
	北方							
○●●●○○●●○○	上海						5.00	5.00
	北方							
○●○○○●●●○○	上海							
	北方							3.85

上記の結果を受けて、なぜ学習者の複合語アクセントに二度上がり現象が生じたかを調べるために、後部要素のアクセントパターンとの関係も調査した。後部要素のアクセント型をグループ①～④に分けることにした。

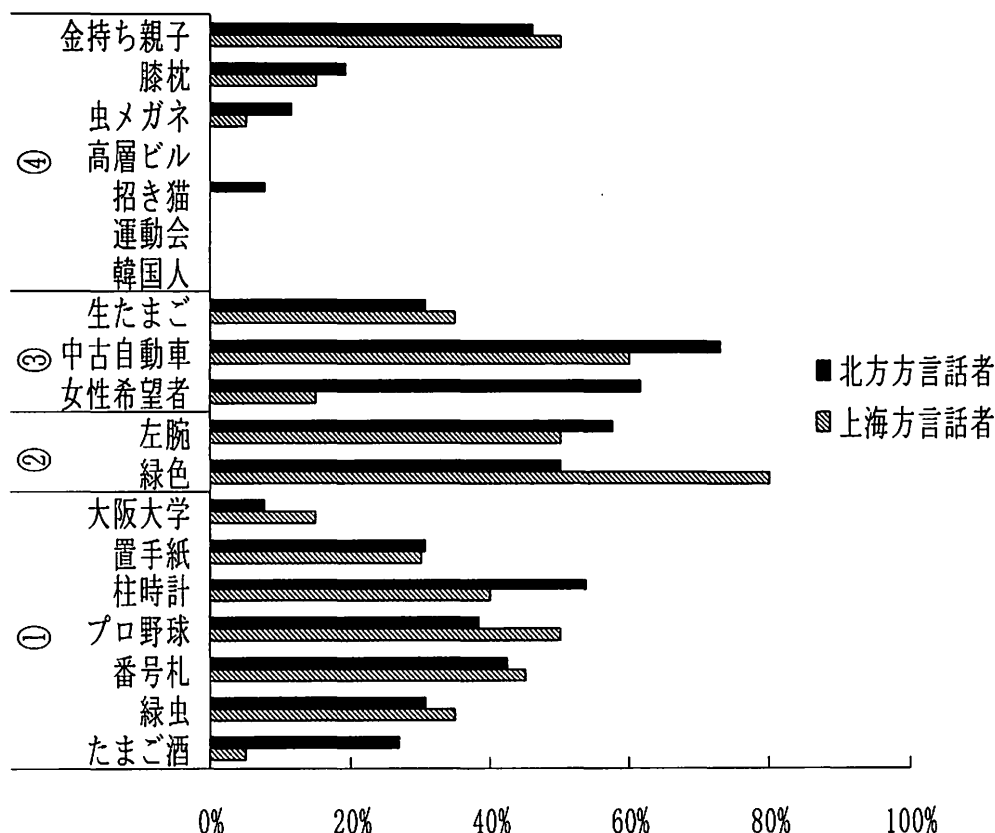


図3 後部要素1拍目で上昇するパターン

(①後部要素平板型②後部要素尾高型③後部要素中高型④後部要素頭高型)

図3では、北方方言、上海方言を母語とする学習者ともに後部要素が平板型、尾高型と中高型の複合語に対して、後部要素の1拍目で上昇する傾向が見られた。つまりこれらの複合語に対して、多くの学習者が前部要素ではすでに一度下がったが、後部要素が平板型、尾高型や中高型であるため、アクセントが再上昇したと見られる。この点については、後部要素のアクセント型（中高型、平板型、尾高型）による明確な違いは出ていない。複合語の前部要素と後部要素を別々で発音するという実態をここで確認することができた。

続いて複合語の前部要素と後部要素を特に漢字の場合、その漢字音の声調との関係

から考察したい。表4、5はその結果になる。

表4 上海方言を母語とする学習者の正解率による並べ替え  
(前部要素、後部要素アクセントパターンと漢字の声調の比較)

日		中		単語	正解率 (%)
前	後	前	後		
頭	平	4	2	緑虫	0.00
中	平	1	1	番号札	3.85
中	平		3	たまご酒	7.69
頭	平	4	4	緑色	26.92
平	中	1	4	中古自動車	26.92
平	平	3	3	左腕	34.62
平	中	3	1	女性希望者	34.62
平	平	4	2	柱時計	38.46
頭	平		3	プロ野球	53.85
中	頭	1	1	金持ち親子	53.85
平	中	1		生たまご	53.85
平	平	4	3	置手紙	61.54
平	頭	1	3	膝枕	73.08
平	平	4	4	大阪大学	84.62
平	頭	2		虫メガネ	88.46
平	頭	4	4	運動会	88.46
平	頭	1	1	招き猫	88.46
頭	頭	2	2	韓国人	100.00
平	頭	1		高層ビル	100.00



表5 北方方言を母語とする学習者の正解率による並べ替え  
 (前部要素、後部要素アクセントパターンと漢字の声調の比較)

日		中		単語	正解率 (%)
前	後	前	後		
頭	平	4	2	緑虫	0.00
中	平	1	1	番号札	0.00
中	平		3	たまご酒	5.00
頭	尾	4	4	緑色	10.00
平	尾	3	3	左腕	40.00
平	中	1	4	中古自動車	40.00
頭	平		3	プロ野球	50.00
平	平	4	3	置手紙	50.00
中	頭	1	1	金持ち親子	50.00
頭	中	1		生たまご	55.00
尾	平	4	2	柱時計	60.00
平	平	4	4	大阪大学	75.00
平	頭	1	3	膝枕	85.00
平	中	3	1	女性希望者	85.00
平	頭	2		虫メガネ	90.00
平	頭	4	4	運動会	90.00
平	頭	1	1	招き猫	95.00
頭	頭	2	2	韓国人	95.00
平	頭	1		高層ビル	100.00

2つの表は、学習者の複合語の正解率を昇順に並べ替えて、前部要素と後部要素

の日本語アクセントを中国語漢字音の声調と合わせたものである。ここでは、中国語声調のトーンの起点が単語全体にどのような影響を与えるかをみるために、前部要素と後部要素の一字目の漢字音のみ対象となる。表から、両グループともに複合語になると、どれか特定の中国語の声調が前部要素あるいは後部要素の日本語に影響しやすいという傾向がなく、逆に日本語のアクセントに注目すると、前部要素が平板型で後部要素が頭高型の複合語に対して、高い正解率になっていることが分かる。それは、楊（1993）で、中国語には「前平後降」の組み合わせが多いため、中国人学習者が日本語もこのように発音する傾向があるとの指摘を裏づけたものと思われる。つまり、複合語の場合は、単語のように一字の漢字音より語全体に対して、中国語の声調パターンが影響しやすいと考えられる。また反対に、後部要素が平板型の場合、正解率が低いことが分かる。

#### 4. 結論

今回、中国北方方言を母語とする学習者と上海方言を母語とする学習者を対象に日本語の名詞複合語アクセント発音パターンを調査したところ、主に以下のような結果が得られた。

- ① 前部要素が平板型で、後部要素が頭高型のパターンが学習者にとって習得しやすく、その中には、複合語のアクセント核が後部要素 1 拍目にあるパターンがもっとも習得しやすいことが分かった。
- ② 平板型アクセントの単語が後部要素になるともっとも習得しにくく、二度上がり現象が起きてしまうことが分かった。
- ③ ほとんどの発音パターンが両グループに共通して現れたことから、複合語の発音において、母方言の韻律的影響より、学習者の日本語の複合語に対する認識が発音に導く主要因になっていることが分かった。

これらの結果を受けて、中国人日本語学習者に対して、名詞複合語アクセントの教育には、下記を提言したい。

- I. 日本語のアクセントを初級日本語の時だけでなく、上級になっても、継続的に学習者の習得状況をチェックし間違ったところを訂正する。
- II. 名詞複合語のアクセントに対して、A) パターン化したもの（地名、大学名、駅名など）と、B) そうでないものをグループ分けし、A→Bの順番で学習する。この段階ではすでに一部の複合語に対して二度上がりのあやまちを回避できる。
- III. 二度上がり現象が起きやすいパターンに対して、意図的に反復練習し、正し

い発音を植えつける。

## 5. 今後の課題

今回、中国北方方言を母語とする学習者と上海方言を母語とする学習者に対して、日本語の名詞複合語アクセントの発音パターンについて調査を行った。実験が被験者にかかる負担を考慮して、実験用語の量を十分に提示することができなかった。今後より実験用語を抜粋し、更に動詞、形容詞の複合語も取り入れ再検証を行いたい。

また、今回は両グループともに上級者だったが、今後は初級、中級学習者や滞日経験ある人となない人も対象とし、さらに同じ対象者に日本語運用能力の各段階における縦断的調査を行い、どのような差があるか、またその習得過程においてどんな傾向があるかを探っていきたい。

---

## 注

- (1) ここで言う母方言は、学習者の出身方言の代表的なものを指す。現在上海方言は呉方言の代表として一般的に認識され、山東方言は北方方言の下位方言とし、北方方言の代表は一般に北京語と認識されている。
- (2) 複合語については、アクセント変化の基準に沿って、組み合わせた。その基準及び選出単語は下記のとおりである。※
  1. 後部要素 2 拍語の場合：
    - 1-A 前部要素の最後の拍にアクセント核が来る。  
選出単語 3 つ：たまご酒、韓国人、緑虫
    - 1-B 前部の最終拍が特殊拍の場合は、核が一つ前の自立拍に移る。  
選出単語 2 つ：番号札、運動会
    - 1-C 後部アクセント核を保持する。  
選出単語 2 つ：招き猫、高層ビル
    - 1-D 後部が尾高型の和語や漢語の場合、複合語全体が平板型になる。  
選出単語 2 つ：左腕、緑色
  2. 後部要素が 3 拍、4 拍の場合：
    - 2-A 後部要素が頭高型、中高型（3、4 拍の頭高型と 4 拍の 2 型）の場合は後部のアクセント核を残す。  
選出単語 5 つ：虫メガネ、膝枕、金持ち親子、中古自動車、女性希望者

2-B 後部要素が尾高型、平板型および4拍語の3型の場合は後部の1拍目に核が生じる。

選出単語5つ：プロ野球、生たまご、柱時計、置き手紙、大阪大学

※ 上記単語はすべて上級日本語学習者が使用するテキストに現われたもので、単語によって日本語としての使用頻度は異なるし、複合語として見ると、日本語としての一般性に大きな相違のあるものがある（例えば「膝枕」と「金持ち親子」が複合語として同列に並ぶことに違和感があるだろう）。しかし、学習者にとっては、そうした一般性に関する感覚は乏しく、既習単語の組み合わせと捉えられている。

- (3) 日本語教育能力検定試験合格者、日本語教育、方言学を専門とする研究者で普段音声のチェックや、日本語アクセントに関する知識を熟知した方である。
- (4) 評価者間の一致度を確認するため、Cohen's  $\kappa$  の値を求めた結果、全実験用語において  $\kappa = 0.8$  となり、かなりの一致度を示したと考えられる。Cohen's  $\kappa$  値はどの値以上であれば、一致度が安定しているかという明確な基準はないが、今回のような、音を聞いて直感的判断が伴う作業の場合は、0.7以上とされている。従って、評価者の結果を統合して採用することは可能である。

## 参考文献

- 鮎沢孝子、海野多枝、西沼行博、小高京子（1999）「東京外国語大学学部留学生の東京語アクセント習得」文部省科学研究費（創成的基礎研究費）「国際社会における日本語についての総合的研究」新プロ「日本語」ESOP チーム平成10年度研究成果報告書 55-64頁
- 磯村一弘（1996）「アクセント型の知識と聞き取り——北京語を母語とする日本語教師における東京都アクセントの場合——」『第10回日本音声学会全国大会予稿集』日本音声学会
- 岩田礼（2001）「中国語の声調とアクセント」『音声研究』第5巻第1号 18-27頁
- 王伸子（1999）「中国語母語話者の日本語音声習得を助ける中国語方言」『音声研究』第3巻第3号頁36~42
- 窪園晴夫（1999）『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版
- 斎藤純男（1997）『日本語音声学入門』三省堂
- 野澤素子・重松淳（1997）「中国語話者の日本語学習における音声の問題について——北京語・上海語のイントネーションをめぐる——」『日本語と日本語教育』第25号 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター

- 福岡昌子 (1998) 「イントネーションから表現意図を識別する能力の習得研究  
中国 4 方言話者を対象に自然合成音声を使って」『日本語教育 96 号』頁 37  
～48
- 楊立明 (1993) 「中国語話者の日本語述部の韻律に見られる母語の干渉」『日本語  
音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の  
実態とその教育に関する総合的研究」D 1 班平成 4 年度成果報告書
- 柳悦 (2006) 『中国北方方言・上海方言を母語とする日本語学習者のアクセント  
習得の実態及び母語干渉の原因』東京都立大学修士論文 (未公刊)
- 柳悦 (2006) 「中国人日本語学習者の単純語と複合語アクセント習得——北方方  
言・上海方言話者による内省と発話の差」『日本語研究』26 号, 東京都立大学  
国語学研究室

(りゅう ゆえ・首都大学東京大学院院生)